

第2 樺太(サハリン)の現況について

樺太(サハリン)はロシアの東、日本とは宗谷海峡をへだて、北緯45度54分から54度20分、東経141度38分から144度45分に位置し、南北約948km、東西最大約160km・最小約26kmにわたる細長い島です。

地形的には、山岳地帯からなり、その面積の70%は山岳が占めています。

行政区分では、クリル諸島(北方領土を含む千島列島)とサハリン本島を総称してサハリン州と呼び、17行政区域を有し19の市があります。

本島の面積は7万6,400㎡(北海道の約9割)で、人口は州全体で約48万人です。118の人種・民族から構成され、そのうちロシア人が8割を占めており、その他にウクライナ人・朝鮮人・ベラルーシ人・タタール人等が住んでいます。

また、ウイльта、ナナイ、エヴィンキ等の北方少数民族も居住しています。

日本との関係は18世紀に始まり、島の南端に漁場が開かれ、1809年(文化6年)には間宮林蔵が測量に訪れています。1905年(明治38年)、日露戦争の勝利によるポーツマス条約で北緯50度以南が日本領「樺太」となり、豊原(現ユジノサハリンスク)に樺太庁が置かれてからは、豊富な資源の開発を中心に力をそそがれるようになりました。

樺太は、戦後ロシアの統治下に入り、全土はロシア共和国(現ロシア連邦)サハリン州として構成され、豊原はユジノサハリンスクと名を変え、現在も州都としてサハリン(樺太)の政治・経済の中心となっています。

森林・鉱物資源に恵まれ、林業・製紙工業・石炭工業が盛んであり、また、海に囲まれていることから水産資源が豊富で、漁業もサハリンの代表的な産業となっています。

○ ユジノサハリンスク

サハリン州の州都、人口約20万人。日本領の頃は豊原と呼ばれ、樺太庁が置かれていました。ススヤ川流域に開けた旧鈴谷平野の中心にある街で、サハリンの行政、経済、文化の中心になっています。

旧樺太庁跡は市役所が建ち、その他の建築物も多くは建て替えられているものの、日本領の頃の基盤の目の街並みはそのまま残っています。

○ ホルムスク

樺太第二の都市で人口5万2千人。日本領時代は真岡と呼ばれていました。

西海岸随一の港湾都市で、大陸のワニノとを結ぶ鉄道連絡船が発着しており、大陸から食料、雑貨等を搬入し、樺太の資源を大陸に送っています。不凍港であり、サハリンと大陸とを結ぶ重要な拠点となっています。

また、ホルムスク製紙が、旧王子製紙真岡工場をそのまま引き継いで操業を続けており、現在も製紙パルプ工業の盛んな街となっています。

他に船舶修理工場、製缶工場、缶詰工場等の漁業関連企業が多くあります。

○ コルサコフ

樺太第三の都市で人口4万6千人。日本領時代は大泊と呼ばれていました。当時の大泊港（現コルサコフ港）は、北海道の稚内とを結ぶ鉄道連絡船「稚泊航路」が発着していましたが、戦後は軍港となり一般船の入港は禁止されました。しかし、1991年（平成3年）の日ソ海運協議により、再び国際貿易港として開放され、95年には稚内との定期船も復活しました。

サハリン最大の不凍港をもつ漁業・商業都市であり、サケ等の缶詰製品はヨーロッパなどに輸出されています。

（参 考）

○ 樺太の鉄道

当初、軍需輸送目的の軍用軽便鉄道として大泊～豊原間に開通し、以後樺太の鉄道は、拓殖を目的に順次延長されました。昭和に入ると、パルプ、製紙工場の産業路線として私鉄が発足し開業しましたが、その後多くの路線が樺太庁に統合され、1943年に庁有鉄道から国有鉄道（樺太鉄道局）へと移管され、終戦後の1946年には旧ソ連に正式移管されました。

今日の樺太（サハリン）鉄道の路線のほとんどは、日本領時代に開通したものです。そのために、線路の幅が大陸側よりも狭く、日本のJR在来線と同じ1067mmとなっています。しかし近年、大陸と同じ線路幅に変更する工事が進んでおり、日本領時代の線路幅は徐々に失われようとしています。